

## 気がかりな姿のある児童生徒が在籍する通常学級における集団づくり —学級経営を踏まえた「集団」と「個」への支援を視点にして—

### はじめに

「人にとって、一番、悲しく、寂しいことは、自分が必要とされていないことを感じることであり」といわれます。いつでも、どんな時代であっても、すべての児童生徒に、自分の存在意義、存在価値を感じられるようにしたいと考えます。現在、発達障害のある又は、発達障害が疑われる児童生徒が通常学級に在籍しています。幼稚園、小学校、中学校、高等学校等では、集団で生活し、集団で学び合うことを通して、人を育てるという特色があることを考えると、集団を動かしながら、存在意義等を感じられるようにします。本稿では、集団活動を中心に据えながら、個への支援を行い、人との温かい触れ合いを感じられる集団を創っていくには、どうすればよいかを考察します。

### I 児童生徒が「安全」「安心」という感情を持つことの重要性

#### 1 現代の学校事情と家庭の事情、そして児童生徒の事情

現在、学校では、いじめ、不登校、非行、学級崩壊、発達障害等のある児童生徒への対応等、たくさんの課題があります。その課題は複雑に絡み合っていることが多く、それはほとんど同時進行です。教師の多忙感は、極まりないと思います。また、課題の原因は、学校にあるばかりではなく、家庭や地域にある場合も多いと思います。いじめや非行等を起こす児童生徒のほとんどは、家庭の事情で、幼少の頃から寂しい環境に置かれています。たった一人で食事をしたり、遊んだりしています。また、道徳性のない大人たちの中にあって、人の心を持ち得なかった児童生徒も多いといわれます。こうした環境で生きていた児童生徒たちは、何を考え、何を感じて、生活していたのでしょうか。冷え切った家の中にあって、窓をたたく風の音におびえ、小さな心を震わせていたのではないのでしょうか。保護者にもつらい幼少期の生育歴があるケースがあります。このような特別な事情を理解できた時、私たちはやはり、児童生徒が物質的にも、精神的にも「安全」に裏付けられた「安心」した生活が送れる環境を整えることを糸口にしていきたいと考えます。児童生徒が「安全」「安心」した感情を持つということは、成長を支える大きな栄養素であると考えます。



#### 2 人として不易なもの“人を思いやる心”

人が人として育つためには、人の力が不可欠です。豊かなものの見方・考え方をもち、自分と他人を大切に、日々の生活の中で実践している等、児童生徒にとって手本となる人の存在が必要です。正に“人を思いやる心”の持ち主の存在が必要です。どんな職業にあっても、成功している職業の要因の一つには、「真のサービスは真心、偽物のサービスは下心」という言葉に代表されるように、他の人に喜んでもらいたい、幸せになってもらいたい等々の人を思いやる心が根底にあって、利潤を考えています。大きな利潤が得られた時には、他の人のために役立ててほしいと利潤の一部を寄付する人もいます。人を思いやる心は、いつの時代であっても、不易なものであると考えます。人を思いやる心のある場所が、児童生徒にとって、「安全」で「安心」して過ごせる場所であると考えます。



## Ⅱ 「集団への支援」と「個への支援」の2つの柱

### 1 「集団」と「個」の2つの柱

「人を思いやる心のある場所」としての学級を創ることを考えた時、気がかりな姿のある児童生徒のみへの支援を実践したのでは、不十分です。一見、異質と思われ勝ちな気がかりな姿のある児童生徒の発言や行動の背景を理解し、かかわり方を学び、実践していくことで学級全体が「人を思いやる心のある場所」へと変わっていきます。同年齢である友達の少し違った言動や行動を受け入れることは、児童生徒にとってそれほど簡単なことではありません。しかし、こうした学習経験は、変化の激しい社会、価値観が多様化する現代にあって、人を思いやる心を持ち、人とよりよくかかわる力を高めることにつながっていきます。

また、現代の学級の傾向を考えると、始業のチャイムが鳴っても、席に着かない児童生徒が5～6人いたり、授業中におしゃべりをしたりする児童生徒が増加している状況が考えられます。これまで、個へ行っていた特別な支援が学級全体に必要な場合もあります。



### 2 集団への支援

#### (1) 道徳的価値を踏まえたルールの設定

学級は、一つの社会と考えられるので、ルールが必要です。ルールがむやみに厳しすぎてもいけません。温かい雰囲気のある学級は、すべて自由奔放ではありません。ルールを設定する場合に大切なのは、ルールの中に児童生徒の協議による自己決定事項が入っていることです。当然、ルールには学校として、学級として集団が成立するために必要な事項が入ります。しかし、ルールは他から与えられるものばかりではいけません。自分たちが考え、決めて、実行するルールが必要です。児童生徒が決めるルールは、建設的で、道徳的価値を踏まえた事項が大切です。

#### (2) 温かい触れ合いの場の設定

現代の学級の中には、「うざい」「きもい」「あいつ、やばくね！」等の元気を奪う言葉が横行しています。逆に「ありがとう」「ごめんね」「いいね」「すごい！」等、元気が出る言葉があります。ほんの些細なことと思われかもしれませんが、日々、同じ人と過ごす学級にあっては、こうした元気の出る言葉を増やすことは、活力のある学級を育てます。このように、ほんの少しの温かい触れ合いの場を設定し、心が温かくなる経験を積み重ねることで、児童生徒は気がかりな姿のある友達を少しずつ、受け入れられるようになります。

#### (3) 個に対する集団の認知を変えること

自分の担当する活動をやらなかったり、人の意見にいつもケチをつけたりする等の児童生徒を学級の友達は「いやな子」として見ます。これは、誰でも同じです。でも、現れている現象の意味や原因を知ると、自分の担当する活動をやらない子は、先生の話だけでは分からなかったり、どのようにすればよいかを知らなかったりするのではないかと考えることができます。また、人にケチをつける子は、小さいときから自分が認められていない状況があるのではないかと考えるようになります。人は誰でも、ものごとをプラスにとらえると解決の第一歩を踏み出します。学級の中に、ものの見方、考え方を変える雰囲気やプラス思考で考える経験を設定することが大切です。後に、温かい触れ合いの雰囲気ができた時には、プライバシーの侵害にならない程度に、対象の児童生徒の姿の背景を話すことが大切です。

#### (4) 保護者とともに進めることの大切さ

現代の社会では、保護者の傾向が以前に比べ、変化してきていることが指摘されています。上記のような学級づくりのねらいや日々の実践の様子、児童生徒のよい姿などを、学級懇談や通信等を通して、広く保護者に公開することで、保護者が学ぶ機会を設定することが必要です。通信では、保護者からの一言等のコーナーを設け、意見を吸い上げます。保護者会では、保護者がグループごとに、「気がかりな姿のある児童生徒とのかかわり方について家庭でできること」などについて、気軽に情報交換をしたり、協議したりする機会等を設定する中で、家庭で子どもをどう育てるかを学ぶ機会にします。



### 3 個への支援

#### (1) 児童生徒の姿を基本に障害の特性を参考にする

気がかりな姿には、読み書き計算が極端に苦手だったり、席をすぐに離れてしまったり、場の雰囲気を読めずに、その場にふさわしくない言葉を言ってしまったりする姿があります。また、これらの姿が混在している児童生徒もいます。学習障害、注意欠陥多動性障害、アスペルガー障害等の特性から支援を考えることも一つの方法ですが、同じ障害であっても、生育歴、家庭環境、こだわり等は違います。対象の児童生徒の日頃の言動や行動を観察するとともに、実際にかかわる中で、児童生徒を理解していくことが大切です。

#### (2) 「説明→手本を示す→試行→褒める」の積み重ね

- ①説明 ……絵や図等を使ったり、その場に行ったりして、簡単な言葉で、短く説明します。
- ②手本を示す ……教師が目の前でやって見せます。その際に、ポイントなるところをはっきり伝えることが大切です。
- ③試行 ……本人が実際にやってみます。
- ④褒める ……気がかりな姿のある児童生徒は、失敗した時に叱咤された経験を多く持っています。そのため、自己肯定感や自信がないことが考えられます。自己肯定感等がないと人は成長を止めます。どんな小さなことでも褒めること、できなくても、やろうとした姿を褒めることが必要です。

### Ⅲ 「集団への支援」の指導の実際に向けて

#### 1 児童生徒たちが考え、決める「みんなのルール」

次のような実践があります。



ある学級では、5分前着席が決まっていた。しかし、児童生徒たちの間では、5分前であると、10分休みや昼休みの時間が短くて、心のゆとりもないという声が聞かれていた。担任は、学級での話し合いで、始業時に着席することの必要性やゆとりについて協議することにした。可決されたのは、「チャイムが鳴り終わるまでに着席すること！」担任は、守れない場合は元に戻すことを条件に、これを了承した。チャイムが鳴り終わるまでに着席しない児童生徒は今だに1人もいない。

#### 2 増やせ！元気言葉！（温かい触れ合いの場づくりの第一歩）

道徳やロングホームルーム等の時間に次のような話をします。

### 【トップアスリートと他の選手との違い】

宮里 藍・石川 療（ゴルフ）は、どんな時にも、マイナスな言葉は言わない。どんなに調子が悪くても、自分のよいところを見つけ、言葉に出す。これは、脳科学の立場からすると理にかなっている。人は、マイナスの言葉とプラスの言葉に支配されるようになっている。プラスの言葉を発すると、成功するようになっている。

次に、児童生徒に、朝から自分の発した言葉を上げてもらいます。

例「うぜえ」「だりー」「むかつく」「めんどい」「やべー」「ざけんなよ」等々  
これでは、うまくいくものもうまく行くはずがないことを伝えます。

最後に、次回の予告！

◇これから1週間は、マイナス言葉は一切話さずに、プラス言葉で話す！自分の変わり方を次回は発表する。→「やれる」「大丈夫！」「感謝」等は、成功に導く、元気言葉！

## IV 「個への支援」の指導の実際に向けて

### 1 怒りの感情をうまくコントロールするために

＜感情のコントロールが苦手であることの原因＞

- ・幼少の頃から、がまんばかりしていた
- ・怒ると自分の思い通りになることを誤学習してしまった
- ・発達障害があるために、感情を上手に表現できない、また他の人の言動を誤解する
- ・上記の事項が混在している



※上記のようなことを留意して、特に発達障害のある児童生徒には、次のような支援を行います。

＜感情のコントロールに必要なこと＞

#### (1) 自分の感情を理解する

◇その場から離れ、落ち着ける場所へ移動します。気持ちが落ち着いてから、原因や理由を静かに聞きます。共感的に受け止め、自分の感情を振り返ります。

#### (2) 感情を静める方法を身につける

◇その場から離れる、深呼吸する、ハンカチなどを握りしめる、10数える 等

#### (3) 自分の感情を表現する方法を学習する

◇感情の度合いを示した絵カードを指さし、「わたしは、〇〇が嫌いなので、やめてください。」などのカードを使って、気持ちを伝える学習を行います。

#### (4) 周りの人の気持ちを理解する

◇自分が感情を爆発させてしまった時の周りの様子を振り返ります。相手の表情に着目させることも大切です。

### 2 場の雰囲気を読むことができるようになるために

「その服似合わない」「太っているね」等、相手の気持ちを考えずに思ったことを言ってしまう児童生徒の中に、発達障害のある児童生徒がいます。

＜人の気持ちを考えようとするができるようになるために＞

#### (1) 場面をとらえて、一緒に振り返る

(2) 簡単なイラストを描いて、適切な言動を伝える（相手が傷つくでしょ！等は避ける）

(3) 表情を示した写真や絵などを使って、気持ちを推測する学習を行う